

はじめに

学生時代から何十年と“島”に向き合ってきたが、今もって“離島”という言葉は好きではない。“離島”という響きからは、離農、離村、離職などと同様、島から離れる、離れ島、ひいては過疎地、さらに離島苦などが連想される。また、このような離島のイメージに呼応するように、今日、島嶼地域は本土との所得格差も大きく、職場、教育、医療などを含めた居住条件が不利なことから、人口減少率や高齢化率も高く、今後、いっそう生活の維持が困難となる島々も増加するものと考えられる。このように島々を取り巻く環境が厳しさを増す状況を考慮し、本書は“島嶼研究”とはせず、あえて“離島研究”とした。

しかし、島は超歴史的に停滞している地域ではなく、海の交通が主役の時代には、多くの島々は先進地域であった。今日でも、日本の島々が、おしなべて一様に人口減少をみているわけではない。数は少ないが、意外にも人口増加を続ける島々や、人口を維持しながら活発な生産活動を続けている島もある。また、産業に関しても、豊かな自然を活かした農業、漁業、観光の島々、あるいは造船業、採石業の島などと様々である。

このように、島は多様性を持つ一つの複合体といえる。これまで島を対象とする研究は、経済学、社会学、民俗学などそれぞれの専門分野からもアプローチされてきたが、島という複合体、多様性を持つ地域の把握には、広い分野を包含する地理学的研究が、その総合性において、きわめて有効であると考えている。また、その研究は地味ながらも、長年、持続的に行われてきたのであり、その研究成果の一端を集約して、2003年に『離島研究Ⅰ』、続いて2005年に『離島研究Ⅱ』、2007年に『離島研究Ⅲ』、2010年に『離島研究Ⅳ』を刊行し、今回で5冊目となる。

この『離島研究Ⅴ』の編集にあたっては、2004年に日本地理学会に「離島地域研究グループ」を立ち上げて以来、ともに活動が続けてきた駒澤大学の須山 聡氏と琉球大学の宮内久光氏に関わっていただいた。編集作業がスムーズに進んだのも両氏のおかげである。

本書の構成は、Ⅰ 島へのまなざし(1～2章)、Ⅱ 島の環境と暮らし(3～5章)、Ⅲ 島をめぐる人口移動(6～8章)、Ⅳ 島の産業——その盛衰(9～13章)の4部13章からなる。

Ⅰ部1章では宮内久光氏が、近代地理学が確立した1907年以降、107年分の離島研究論文のデータベースを作成、その研究動向の特色を明らかにし、2章の須山 聡氏は、全国の島の郵便局に設置された風景印に注目し、風景印の「島らしさ」の景観出現を究明している。

Ⅱ部では、3章の高木 亨氏と瀬戸真之氏が、三宅島噴火災害の5年間に及ぶ長期避難と、その復興過程を検証しており、福島原発事故問題にも示唆を与えるものとなっている。4章の藤永 豪氏は、喜界島集落の環境利用と生活空間を分析し、そこでの生業活動が、海から台地へと広がる自然空間を巧みに利用した複合的なものであったことを指摘した。5章の森田枝里子氏は、深刻さを増している小規模離島である愛媛県の睦月島の高齢化と、そのサポートシステムについて詳細に検証している。

Ⅲ部では、6章の花木宏直氏が、芸予諸島、大三島の近世の出稼ぎから、近代の海外移民への

展開(連続性)を「ゆるやかな専業化」と「広域化」と言う概念で言及し、7章の鄭美愛氏は、若くして郷土を離れてもその後帰郷する奄美大島の「長周期Uターン」を分析、その要因が「同郷者の濃密な関係性」であることを検証した。8章の又吉祥一郎氏は、移住者の増加による石垣島の混住化社会を詳細に分析し、その集落(地域社会)のあり方にも言及している。

IV部では、9章の清水克志氏が、宮城県の浦戸諸島のハクサイ採種業について分析し、島のもつ「隔絶性」が純良種を得るための有利な条件であったことを明らかにした。10章の植村円香氏は、瀬戸内海中部の岩城島の高齢就農者を分析し、高齢者による柑橘類の新品種栽培は、ひとつの実験場的な役割があることを指摘した。10章の平岡は、これまで研究が行われてこなかった奄美諸島の糖業動力と搾取にスポットをあて、その変遷を明らかにし、12章の三木剛志氏は長崎県池島の炭鉱開発について、地域住民と会社とのせめぎ合いと、その地域変容を詳細に分析している。13章の助重雄久氏は、宮古島の観光におけるインターネットの役割を検討し、短期間のうちに電子媒体と情報収集の多様化が進んだことを指摘した。

以上、13編の論文を収録したが、いずれの論文も離島地域を対象に、地理学的手法でさまざまな角度より詳細に分析したものである。本書『離島研究V』が、これまで刊行した4冊とともに、島の研究に寄与でき、かつ、島への理解を深める一助となれば、編者にとって望外の喜びである。

刊行にあたっては、今回も図版の多い出版を快く引き受けていただいた海青社社長の宮内久氏と編集部の福井将人氏に心より御礼申し上げたい。

2014年10月17日

平岡昭利

離島研究 V

目次

研究対象の島の位置 (③～⑬)

(図中の番号は章を示す)

- ① 離島研究の動向
- ② 島の風景印
- ③ 三宅島(東京都)
- ④ 喜界島(鹿児島県)
- ⑤ 睦月島(愛媛県)
- ⑥ 芸予諸島(愛媛県)
- ⑦ 奄美大島(鹿児島県)
- ⑧ 石垣島(沖縄県)
- ⑨ 浦戸諸島(宮城県)
- ⑩ 岩城島(愛媛県)
- ⑪ 奄美諸島(鹿児島県)
- ⑫ 池島(長崎県)
- ⑬ 宮古島(沖縄県)



[日本全図は森図房による]

はじめに.....	1
I 島へのまなざし	7
1 章 離島を対象とした人文地理学研究の動向	宮内久光 9
I はじめに	9
II 離島研究論文の計量的分析	9
III 戦前期および戦後直後の離島研究の動向	14
IV 「離島の理論研究」の動向	15
V 「離島の系統地理学研究」の動向	18
VI おわりに——今後の展望	25
2 章 風景印にみる「島らしさ」の表現	須山 聡 31
I はじめに	31
II 印影の表現様式	33
III 印影に描かれた空間	36
IV 類型的な島の表現	39
V 個別的な島の表現	41
VI おわりに——島らしさを描く	43
II 島の環境と暮らし	47
3 章 三宅島雄山噴火による長期避難とその後の復興過程	高木 亨・瀬戸真之 49
I はじめに	49
II 三宅島の概要	50
III 2000 年の三宅島雄山噴火とその影響	51
IV 帰島後の産業について	56
V 観光客数の変化	59
VI おわりに	61
4 章 昭和初期の喜界島阿伝における生業活動からみた環境利用と生活空間	藤永 豪 65
I はじめに	65
II 阿伝の概要と澁澤写真	65
III 阿伝における各種生業の内容と活動空間	67
IV 阿伝における環境利用と生活空間の成り立ち	78
V おわりに	80

5 章 忽那諸島 陸月島における高齢者サポートに関する一考察	森田枝里子	83
I はじめに		83
II 離島地域の高齢者サポートに関する研究		84
III 対象地域の概要		86
IV 陸月島における高齢者サポートの現状		88
V 陸月島における高齢者サポートの問題点		92
VI おわりに——離島地域における高齢者サポートの今後		93
 III 島をめぐる人口移動		97
 6 章 近世中期から近代の芸予諸島における出稼ぎと海外移民 ——大三島・旧岡山村を中心に——	花木宏直	99
I はじめに		99
II 研究対象地域の概要		101
III 出稼ぎと海外移民の展開		103
IV おわりに		109
 7 章 奄美大島出身者にみられる長周期Uターン移動の発生要因	鄭 美愛	115
I はじめに		115
II ライフヒストリーの区分と調査対象者の属性		117
III 出郷期および都市生活期におけるライフヒストリー		119
IV 帰還生活期におけるシマの暮らし		121
V 長周期Uターン移動の発生要因		125
VI おわりに		128
 8 章 石垣島川平における混住化と古集落の再編	又吉祥一郎	133
I はじめに		133
II 川平集落における混住化と就業構造		135
III 自治組織からみた川平集落の社会構造		140
IV 集落内行事にみる居住者の相関		142
V おわりに——混住化にともなう地域変化と古集落の再編		146
 IV 島の産業——その盛衰——		151
 9 章 浦戸諸島におけるハクサイ採種業の展開	清水克志	153
I はじめに		153
II 宮城県におけるハクサイ採種適地としての「島」の発見		155
III 渡辺採種場による浦戸諸島でのハクサイ採種経営		157
IV 1960年代以降におけるハクサイ採種業の衰退		162

V	おわりに	166
10 章	岩城島における高齢就農者による柑橘品種の多様化とその地域的帰結.....植村円香	169
I	はじめに	169
II	岩城島の概要	170
III	柑橘栽培品種の多様化と農家への新品種伝達プロセス	171
IV	高齢就農者の新品種の導入とその目的	174
V	おわりに	180
11 章	奄美諸島における糖業動力と搾車.....平岡昭利	183
I	はじめに	183
II	糖業動力の展開と変化	183
III	在来搾車とその改良	186
IV	水車製糖の展開	188
V	共同製糖場と動力革命	192
VI	おわりに	194
12 章	長崎県池島における炭鉱開発と住民の対応.....三木剛志	197
I	はじめに	197
II	松島炭鉱の事業展開	198
III	炭鉱開発以前の池島	200
IV	開発交渉の経緯	204
V	池島住民の就業状態の変化	210
VI	炭鉱開発後の池島	212
VII	おわりに	216
13 章	宮古島観光におけるインターネットの役割とその変化.....助重雄久	221
I	はじめに	221
II	2010 年代における交通と観光の変化	222
III	観光客によるインターネットの活用実態	226
IV	小規模宿泊施設におけるインターネット活用の変化	230
V	おわりに——インターネットによる「遠さ」の解消とゆんたくへの回帰	236
索 引		239

このプレビューでは表示されないページがあります。

1 章 離島を対象とした人文地理学研究の動向

I はじめに

日本の島嶼研究で対象となる島とは、本土と位置づけられた主要5島(本州島、北海道島、九州島、四国島、沖縄島)を除いた全ての有人島である。これらの有人島は、一般的に離島と呼ばれる¹⁾。すなわち、日本の島嶼研究とは離島研究と同義である、ともいえる。

日本には393の離島²⁾が存在し、2010年国勢調査結果によると合計416,341世帯989,617人の人々が生活をしている。離島に対する地理学者の関心も高く、これまで離島を対象とした人文地理学研究(以下、断りがない限り地理学研究とする)は盛んに行われてきた。離島研究が盛んなことが、日本の地理学の特徴の一つともいえよう。日本の地理学者が、研究対象として離島に魅力を感じるのは、離島は豊かな自然環境を舞台に、本土とは異なる独特の社会や地域文化などを形成し、それらが島ごとに多様性に富み個性的であるため、と思われる。

本章では、これまで日本の離島を研究対象として発表された地理学論文を分類・整理し、その傾向を統計的に分析したうえで、研究分野別に研究成果を紹介し、その動向を検討することを目的とする。そのために、まず、これまで発表された日本の離島を研究対象とする地理学論文(著書を除く)を収集し、それをもとに「地理学離島研究論文データベース」と名付けたデータベースを表計算ソフト上に作成した。データベースから発表年や研究分野などを集計することで、研究の傾向を明らかにできる。次に論文を分野別に整理し、主要論文の内容を検討することで、離島研究の動向を把握し、展望していく。

II 離島研究論文の計量的分析

1. 「地理学離島研究論文データベース」の作成

先述したとおり、離島研究の傾向を統計的に分析するために離島研究論文を収集して、「地理学離島研究論文データベース」を作成した。論文を収集する対象期間は、京都帝国大学に地理学講座が設けられ、近代地理学が制度的に確立した1907年以降、2013年までの107年間である。このデータベースへの論文の登録は、次の基準によった。

- ①日本の離島を対象とした、人文地理学の学術論文を登録する。そのため、外国の島を対象とした論文、島の概観や地誌的な論文は登録しない。
- ②学術論文とは、日本の地理学会に所属する者が執筆して、学術雑誌や学術書に掲載されたオリジナル論文、または日本の地理学会が発行する学会誌に掲載されたオリジナル論文である。そのため、学会発表要旨、学生の調査実習報告書やレポート、初出論文を修正して学術書に掲載された論文は登録しない。

このプレビューでは表示されないページがあります。

2章 風景印にみる「島らしさ」の表現

I はじめに

本章では、島嶼部に立地する郵便局に設置された風景印(以下、島の風景印と称する)を対象に、風景印の図像が「島らしさ」をどのように呈示しているかを分析し、その表現原理を明らかにする。

現実の空間から、絵画や写真などの図像として切り取られた景観テキストには、作成者(呈示側)の意図が強く働く。一方、観察者(鑑賞側)は呈示された図像をさまざまに読み取り、場合によっては呈示側の意図せざる解釈を加えることもある。したがって景観テキストの分析では、景観そのものの分析とは異なり、呈示側の思惑や鑑賞側が抱く印象を考察することが必要である。本章で考察する「島らしさ」とは、島を描いていることがわかる図像のありようである。ここでの論考から、何が描かれている図像をわれわれは「島らしい」と感ずるのか、逆に言えば「島らしい」景観を構成する基本的な要素は何か、が明らかとなろう。

このような問題意識に立った場合、風景印は格好の分析素材となりうる。風景印は郵便切手に押捺される消印の一種である「風景入り日付印」の略称であり、全国の約1万局の郵便局に設置されている。日本の島嶼部には857の郵便局が立地し¹⁾、そのうち325局に風景印が設置されている(表2-1)。風景印の印影は郵趣家向けのカatalogや、ウェブサイトでも閲覧することができるが²⁾、本論では実際に郵便局で押印されている印影に基づいて分析するため、対象となる郵便局に対して2011年8月2日に郵便で押印を依頼し、すべての郵便局から印影を得た³⁾。押印日は8月3~16日であった。

風景印は直径36mmで、円内に局名・日付とともに郵便局が立地する地域を表象する図像が描かれる。したがって、風景印には外形的な規格と表現内容の2側面から、緩やかながら制約が設けられている。風景印の標準的な規格は、多様な印影を比較・分析する際の基盤を提供している。風景印の印影に着目することで、画像テキストの比較や集計化が可能となる。本章では風景印のこのような特性を利用し、多様な表現内容を有する風景印の比較分析を試みる。

図像分析の視座としては、パースの記号論の基礎的概念が有効である⁴⁾。記号論の中でも意味論の分野においては、記号はアイコン・インデックス・シンボルに分類される。アイコン(類像)は形態・性質の類似性、インデックス(指標)は因果関係や包含関係を含む近接性によって、指示対象と結びつく。各地に存在する「ひょうたん島」「寝姿山」といった地名は、その形態的な特徴の類似性にちなんで名づけられたアイコンである。また、山頂部からの噴煙を見てその山を火山と判断できるのは、煙が火を指示するインデックスであるからである。

これに対して、シンボルと指示対象の間には類似性や因果関係はない。シンボル(象徴)が指示

このプレビューでは表示されないページがあります。

3章 三宅島雄山噴火による長期避難とその後の復興過程

I はじめに

三宅島は東京湾の南に位置し、伊豆諸島の一部をなしている(図3-1)。直線距離にして東京から約200kmの位置にあり、船で渡ることが容易なため、古くから人間活動の場であった。明治以降の足跡をたどると、三宅島は1878年(明治11)に東京府の一部とされ、1923年(大正12)に島嶼町村制下で神着村、伊豆村、伊ヶ谷村、阿古村、坪田村の5村が設置され、これらが1956年に合併して現在の三宅村が誕生した。島嶼町村制の下で設置された旧5村は、現在も地区として現地に根付いており、島民の地区への帰属意識は低くない。

自然条件に目を移すと、海底からそびえ立つ火山体の、海面より上の部分が三宅島と呼ばれ、中央に雄山が、その周りには多くの寄生火山や爆裂火口がある。このため三宅島の人びとは火山とともに生きてきた。三宅島の人びとは、噴火を繰り返す火山に翻弄されながらも、島で暮らすことを選んできた。また、火山噴出物からなる透水性の高い地質のため、島内に河川は発達せず、水の確保が困難であった。このため、雨水をためる天水槽が家々にみられた。その反面、火山による多様な地形や景観を観光に活かしたり、温泉を利用したりするなど、火山の恩恵も受けている。

ところで、2011年3月11日に発生した東日本大震災は、未曾有の大災害となった。とくに東京電力福島第一原子力発電所事故による放射能汚染により、福島県双葉郡を中心に全住民が避難した自治体が多数発生した。発災から3年あまり経過した現在でも、いまだに住民が帰還できない自治体もある。また、法律上は帰還できるようになったにもかかわらず、住民がなかなか戻らない自治体もある。

さらに、被災地では震災を契機として産業の衰退や高齢化、人口減少などさまざまな社会問題が急激に表面化している。自然災害は、自然現象による直接的な被害に加え、地域が元来抱えていた社会問題を顕在化・深刻化させる。長期的視点では、災害による社会問題への影響は災害の本質的な被害であり、今後解決すべき大きな課題である¹⁾。

災害が原因となり、5年におよぶ長期避難を経験した三宅島の事例は、災害からの復興を考える上で希少である。この経験は、東京電力福島第一原子力発電所事故で放射能に汚染され、長期避難を余儀なくされている被災地の住民帰還に向けた取り組みにもさまざまな示唆を与える。また三宅島は噴火災害を数多く経験し、噴火への地域の対応や、復興の経験が積み上げられ、災害や災害復興を通じて地域の動態を記載するためには絶好のフィールドである。そこで本章では、2000年の三宅島雄山噴火(以下、2000年噴火と呼称する)が三宅村に与えた影響と、約5年におよぶ全島避難からの帰島・復興の経過を、主に産業面から明らかにする。

このプレビューでは表示されないページがあります。

4章 昭和初期の喜界島阿伝における生業活動からみた環境利用と生活空間

I はじめに

喜界島は、鹿児島から南へ約380km、奄美大島の東端から約25kmに位置する周囲48.6km、面積56.94km²の離島である(図4-1)。主に隆起サンゴ石灰岩によって構成され、段丘状の地形を呈し、頂上部には百之台と呼ばれる台地が広がる。喜界島の主要産業はサトウキビを中心とした農業であり、これに関連する製糖業や酒造業も島の経済を支える重要な柱となっている。近年では、ゴマやキク、メロン、スイカ、マンゴー、カボチャ、ローズグラスなどの新たな作物が栽培されるようになり、いわゆる“甘蔗モノカルチャー”からの脱却が図られている。特に白ゴマの生産量は日本一であり、喜界島の特産品となっている。とはいえ、依然として、サトウキビが喜界島農業の屋台骨を支える状況に変わりはなく、島全体にサトウキビ畑が広がっている。

このように、現在ではサトウキビ一色の喜界島であるが、かつては、集落によっては稲作も行われ、麦類や雑穀類(アワやキビ)、イモ類(サツマイモやタイモ)、マメ類(ダイズやソラマメ)、各種野菜類などの多様な作物が栽培されていた。もちろん、こうした農業は自給自足を基本的な前提としたものである。また、各戸では、ブタやヤギなどの家畜も飼育されていた。沿岸の集落では、“おかず捕り”としての漁撈も盛んであった。この他、食料に加え、燃料や肥料、飼料、建築資材など、生活の各種側面において必要な物資を調達(採集)するための様々な生業活動がみられた。これらの生業活動は、マイナー・サブシステンス(副次的生業・遊び仕事)的なものも含めた複合的な性格を有していた。本章では、このような生業活動の内容と場所の結びつきを中心に検討することで、喜界島の人々が自らを取り巻く自然環境をどのように利用し、どのように生活空間を展開してきたのかを、同島の阿伝集落を事例に考察する。

II 阿伝の概要と澁澤写真

本章の対象となる阿伝は、喜界島東岸のやや南よりに位置する(図4-1)。2013年の人口は84、世帯数37であり、住民の平均年齢は62.8歳と、若年層の流出と高齢化が進んでいる。

前述したように、喜界島はサンゴ礁が隆起して形成された島で、西側は緩やかな段丘状の地形を成しているが、東側は頂上部の百之台から標高差およそ200mの急崖、その下の細長い狭隘な低地、石灰岩質の岩礁が広がる浜、海と続く。阿伝はこうした地形上に立地する(写真4-1)。沿岸部を県道619号線が通り、島内の主要集落を結んでいる。現在の公民館(総合研修センター)の北側から集落の中央を分けるように延びる道路を境にして、北東側をシルマテー、南西側をメーテーと呼んでいる。阿伝の内部には、網目状に細い道が走り、その両側にはサンゴ石の石垣が続く。三叉路には、いくつものイシガンドウ(石敢當)が置かれ、集落の北東には末吉神社が祀ら

このプレビューでは表示されないページがあります。

5章 忽那諸島 睦月島における高齢者サポートに関する一考察

I はじめに

現在、日本全国で離島振興対策実施地域として108市町村、254の有人島が指定されている¹⁾。これらの離島は、過疎・高齢化の著しい進行、主幹産業である農林水産業の低迷、市町村合併による体制の変化など、さまざまな問題に直面している。とりわけ高齢化が地域に及ぼす影響は深刻になっている。

離島では、本土と比較して子ども世帯と別居する世帯が多いため、高齢者を支える若いマンパワーは少ない²⁾。また、地理的隔絶性・環海性という自然条件から、公的な生活・介護サービスの選択肢にも大きな制限を受けており³⁾、高齢化に伴う様々な問題の解決を難しくしている。

このように、定型化された社会資源が少なく、高齢者の生活を支える担い手の少ない離島は、高齢者にとって決して住みやすい地域であるとはいえない。しかし、長く住み続ける住民が多いことにより特有のコミュニティが成立している。高齢者の生活においては近隣同士の付き合いや助け合いが頻繁であり、生活支援に発展可能な要素が数多くみられる⁴⁾。高齢者が長年住み慣れた地に定住し続けるうえで、こうした社会的な人間関係は大きな意義を有しており、脆弱な公的サービスを補完し、新たな支援体制を生み出す可能性がある⁵⁾。

以上の点から本研究では、愛媛県松山市忽那諸島の睦月島を事例地域に、離島地域における高齢者の生活を支えるサポートの構造を明らかにすることを目的とする。サポートの資源には、公的サービスを中心としたフォーマル・サポートと地縁や血縁に基づき提供されるインフォーマル・サポートがある⁶⁾。離島では絶対的に前者の資源が少ない。

本研究では、この両者のサポートに関する実態調査を通じて、島嶼部の脆弱なフォーマル・サポートを補完するべくインフォーマル・サポートが十分に機能しているのか、また高齢化の進む離島において両サポートはどのようなあり方が望ましいのかに注目して考察を行う。

対象地域である睦月島は、忽那諸島に属する(図5-1)。忽那諸島は、松山の北西沖に位置し、大小27の島から構成され、睦月島は、忽那諸島の主島である



図5-1 愛媛県松山市忽那諸島

このプレビューでは表示されないページがあります。

6章 近世中期から近代の芸予諸島における 出稼ぎと海外移民

— 大三島・旧岡山村を中心に —

I はじめに

瀬戸内地方では、近代以前より人口が増加するとともに商品生産が隆盛し、家大工や船大工等の出稼ぎが盛んに展開した。本章の研究対象地域である芸予諸島においても、近世中期以降、大島の杜氏や伯方島の石工(ともに愛媛県今治市)、芸予諸島各地からの塩田工夫、大工、船大工といった、さまざまな職種の出稼ぎが展開した¹⁾。また、瀬戸内地方は、近代以降、広島県安芸郡や佐伯郡、山口県大島郡からのハワイ移民をはじめ、多数の海外移民を送出した²⁾。芸予諸島においても、明治後期以降、マニラをはじめ海外各地への移民の送出がみられた。

瀬戸内地方からの人口移動に関する従来の研究について、まず、出稼ぎを扱った研究に注目すると、本章の研究対象地域である芸予諸島をはじめ、近世中～後期には出稼ぎが恒常化していたことが指摘されており³⁾、出稼ぎ者が記した回顧録の翻刻もみられる⁴⁾。近代以降の出稼ぎ者の送出についても、人口過剰や生産基盤の脆弱性、経済的困窮にとどまらず、歴史的な人口移動の恒常化が大きな要因として指摘されている⁵⁾。

しかし、これらの研究では、近世中期から近代にかけての、職種や出稼ぎ先の変化について十分検討されていない。また、海外移民を扱った研究に注目すると、近代日本において最初の海外移民送出地域である広島県安芸郡や佐伯郡、山口県大島郡に注目したものをはじめ、多くの研究が蓄積されている⁶⁾。しかし、従来の研究では、出稼ぎと海外移民は別個に検討されてきた。本章では、出稼ぎと海外移民とを一連の現象として捉え、その相互関係についてより詳細に検討したい。

以上の点を踏まえ、本章は、瀬戸内地方の芸予諸島における、近世中期から近代にかけての出稼ぎの変化と、出稼ぎと海外移民との関わりを検討する。研究対象地域として、芸予諸島の中でも近世中～後期より出稼ぎが盛んにみられ、近代以降にはマニラ移民を送出した、大三島にある愛媛県越智郡旧岡山村くちすば口総(現、今治市)および周辺地域に注目する。目的を達成するため、Ⅱでは、統計資料や外務省外交史料館に所蔵されている歴史的公文書を用いて、旧岡山村の出稼ぎと海外移民の推移を概括する。Ⅲの1・2では、今治市大三島支所や関前支所に所蔵されている古文書や歴史的公文書を用いて、近世中期から近代の旧岡山村における出稼ぎの動向を明らかにする。Ⅲの3では、聞き取りをもとに、職種と出稼ぎ先に注目し、出稼ぎから海外移民への展開について検討する。

なお、出稼ぎや海外移民は、経済的困窮や災害、政策、異郷への憧憬をはじめさまざまな要因により送出される。また、帰郷の意思の有無や移住期間についても個人差が大きく、同一の個人でも年齢を経るにつれ帰郷の意思の変化が当然起こりうる。さらに、帰郷の意思があっても実際に帰郷できない場合や、永住するつもりであってもやむをえず帰郷する場合もみられ、意思と行

このプレビューでは表示されないページがあります。

7章 奄美大島出身者にみられる長周期 Uターン移動の発生要因

I はじめに

2006年以降、日本はいわゆる「団塊の世代」の大量退職期を迎え、高齢化が一層進展している。人口の高齢化は、人口分布・人口移動の地理的パターンの変容にとどまらず、地域社会や都市の内部構造といった空間的な様相にも大きな影響を与えると考えられる。地理学分野における高齢者に関する研究では、1970・80年代にアメリカにおいて先駆的研究がなされ¹⁾、日本においても1990年代以降高齢者を対象とする独自の分野が確立された。当該分野での研究は高齢者の居住環境・生活行動の考察、および介護・福祉サービス需給の空間的特性の分析に大別できる。前者では地方における高齢者の居住継続条件を解明した田原・神谷や中條が代表的な成果である²⁾。また都市における居住環境に関する論考として西、平井があげられる³⁾。田原・神谷は高齢者の居住継続に「内側性」の獲得が必要であることを強調し⁴⁾、西は高齢者のみからなるコミュニティが周囲の地域社会から孤立する危険性を指摘している。後者の研究では宮澤、杉浦のようにサービス施設の分布から需給バランスを考察する研究や、特定の自治体を取り上げて介護サービスの実態を解明した宮澤など、多様なスケールでのアプローチが展開されている⁵⁾。

一方、人口地理学の分野では、高齢人口の分布と移動が議論の焦点である。アメリカ合衆国ではLitwak and Longinoが退職者の人口移動モデルを説明する3段階モデルを提示したが⁶⁾、日本でも田原をはじめ、退職を契機とした人口移動の活発化についての論考がなされた⁷⁾。また退職高齢者の空間的移動パターンの発見に関心が集まり、大都市圏郊外への移動が指摘されてきた⁸⁾。日本の高齢人口移動研究では子ども世代との関係性が強調され、両者が空間的に近接する「近居」が指向されることが示された。

しかし、地方出身者が出身地に帰還するUターンや、豊かな自然環境やゆとりのある暮らしを求めて地方に移住するIターンの存在も以前から指摘され、地域の活性化を企図した地方自治体の中には、これを政策に取り込もうとする動きもみられる。すなわち、高齢者の人口移動については、都市圏内で完結する短距離移動と、U・Iターンに代表される長距離移動の双方が想定されるが、とくに後者に関する研究蓄積はいまだ少ない。

近代以降奄美・沖縄地域からは、本土都市部への継続的な人口移動が発生した。出郷者たちは出身集落や島を単位に、相互扶助や親睦を目的とした同郷者集団、郷友会こうゆうかいを組織した。須山・郷は、郷友会の枠組みを利用して奄美大島名瀬市街地居住者の居住地移動を分析した⁹⁾。また西村および山口は、本土大都市圏に結成された奄美群島出身者の郷友会の組織構造や機能について考察した¹⁰⁾。本土都市部に移動した出郷者たちのUターン移動を誘発する要因として、郷友会をはじめとする、地縁に基づく出郷者たちの社会的ネットワークの存在を想定できる¹¹⁾。

国土縁辺に位置する島嶼地域は、高齢化が著しい地域である。しかし奄美・沖縄では高齢者が

このプレビューでは表示されないページがあります。

8章 石垣島川平における混住化と古集落の再編

I はじめに

1. 問題の所在と研究目的

戦後、多くの国内離島が人口減少による過疎化や少子高齢化を経験したのに対し、沖縄県内の離島の中には、比較的高い出生率と流出人口の還流によって、人口の維持または増加がみられる島が少なからず存在する。1990年代半ばからは、このような人口増加の要因として、Iターン、すなわち沖縄県外からの移住者の存在が指摘されている¹⁾。

離島への移住者の増加は、既存する集落の人口維持に一定の貢献をなしている。しかし同時に、集落側に立ってみると、企図しない移住者をいかに受容するかという新たな課題を生じさせている。とりわけ、沖縄県の離島では、出自に基づく地縁・血縁を重視した、歴史的連続性を有する地域社会が現在も根強く存在する。ヒト・モノ・情報のグローバル化によって、人々の生活観・価値観は平準化しつつあるが、属性の異なる人々の混住化は従来の集落社会に新たな変容をもたらししていることが予想される。先住者と移住者の混住化は離島の各地で目に見える形で進んでいる。近年は自立的発展を促す振興策の一環として、周辺地域へのUJIターンを含めた人的交流が注目を集めており、多様な主体によって生起される集落の変化をとらえる必要性はさらに増している。

これまで、伝統的な集落でみられた生活空間の変化、たとえば居住や就業の構造変化に関しては、農山村へ波及する都市化現象の中で述べられることが多かった。高橋²⁾は、農業集落として機能する地域の混住化では、結果的に農家集団と非農家集団が空間的・社会的に分離されると指摘した。澤³⁾は、農家の就業形態が集約的農業・不動産経営・通勤兼業に分化し、少数派である集約的農業経営農家によるリーダーシップが地域の伝統的行事の維持につながっていることを明らかにした。一方、古田⁴⁾は、同じような農村を例にとっても、在来とは異質な新住民が分離されず、どちらかといえば伝統的な社会組織に包摂される場合があることを指摘した。これらの研究は、都市化という外部要因が農村社会の変容を促したという点では共通するものの、外部からの人口流入が従来の地域社会を解体に導くと解釈するか、それとも新たな地域社会を形成すると解釈するかで論は分かれている。

多くの移住者が流入している沖縄県の離島集落においても、先住者と移住者の混住化⁵⁾はみられるが、離島は必ずしも都市化の影響がみられる地域ではないことから、三者の視点をそのまま本章の対象地域にあてはめることはできない。なぜなら、都市近郊農村と離島集落では、流入する移住者の属性もその移動目的も異なると推察されるし、そうであるとすれば、混住化が地域社会にもたらすインパクトも同様であるとは考えにくいためである。しかし、地域内の社会経済的状况を明らかにすることが新旧住民の関係性解明の鍵になる⁶⁾と古田が述べるように、混住化か

このプレビューでは表示されないページがあります。

9章 浦戸諸島におけるハクサイ採種業の展開

I はじめに

宮城県の太平洋岸のほぼ中央部に深く入り込んだ松島湾は、大小260余りの島々からなる日本有数の多島海域であり、その風光明媚な景観は天橋立、厳島とともに日本三景に数えられる(図9-1)。とくに、湾周辺の富山、多聞山、大高森、扇谷といった高所から俯瞰する多島海の景観美は、「松島四大観」と称されてきた(写真9-1)。浦戸諸島は、松島湾口を扼して東西に並ぶ島々の総称であり、その呼称は、文字どおり浦の戸、つまり松島湾の門戸であることに由来するといわれる¹⁾。また浦戸諸島は、瑞巖寺や五大堂を擁する松島(宮城郡松島町)に対して、「外松島」とも呼ばれる。

浦戸諸島を構成する島嶼は、桂島、野々島、寒風沢島、朴島の四つの有人島と、漆島、大森島、鷺島など多くの無人島である。島内のいずれの集落も半農半漁村的な性格を有していたが、寒風沢島では近世に御城米蔵が設置され、伊達・信夫地方の幕府直轄領から集められた年貢米を、千石船に積み替えて江戸へ廻送する港町としての機能を兼ねていた²⁾。

1889年(明治22)の町村制施行によって、浦戸諸島は宮城郡浦戸村となり、1950年に塩竈市へと編入された。有人島のうち桂島には桂島と石浜の2集落、野々島、寒風沢島、朴島には各1集落がある。浦戸諸島の4島と本土とは、塩竈市営汽船(1日7～8便)で結ばれている。各集落と塩釜港との片道所要時間は、桂島(23分)、野々島(31分)、石浜(38分)、寒風沢(46分)、朴島(54分)であり、4島ともに離島振興法の指定を受ける島嶼である。

一方、浦戸諸島と鰯ヶ淵水道を挟んで東側には、松島湾内で最大面積の宮戸島がある。宮戸島は、里浜、月浜、大浜、室浜の4集落で構成されており、町村制施行の際には単独で桃生郡宮戸村となった。宮戸村は、1955年の野蒜村・小野村との合併により鳴瀬町、さらに2005年には鳴瀬町と矢本町との合併によって、現在は東松島市の一部となっている。宮戸島では、1963年に対岸の野蒜須崎浜との間に松ヶ島橋が架けられ、県道27号線が各集落を結んでいるため、自動車による本土との往来が可能である³⁾。

松島湾内の島嶼群では、大正期に宮城県で育成されたハクサイの国産品種「松島白菜」の採種が開始され、第2次世界大戦の前後には最盛期を迎えて、当該地域の主要な産業の一つとなっていた。一般的に野菜類の採種栽培では、交雑可能な異品種・異種類の花粉の飛び込みを防いで、純粋な種子を採るための環境を設定することが必須条件となる。そのため、自家採種をする場合には、採種株の周囲に草丈の高い障壁作物(ムギ類など)を植える方法、採種株全体を網で覆う方法などが古くから行われてきた⁴⁾。また販売目的で種子を大量生産する場合には、河川敷や山間部といった周囲との隔絶性の高い場所に専用の圃場を設けて採種を行なった。

ハクサイを含むアブラナ科植物は、とくに近縁種間で交雑しやすく変異性に富む特性があるた

このプレビューでは表示されないページがあります。

10章 岩城島における高齢就農者による 柑橘品種の多様化とその地域的帰結

I はじめに

高度経済成長期以降、西日本を中心に農家世帯主の農外就業により、わが国では農業の兼業化が進んだが、1990年代に入ると、兼業農家の世帯主が定年退職を迎えて就農するケースが増加した。農政や既存研究では、こうした高齢就農者の農業を、「生きがい農業」として捉えてきた¹⁾。しかし、高齢就農者の生きがい農業は零細ゆえ、彼らの農業が地域農業にとってどのような意義があるのか、という点については見過ごされてきた。そこで本論では、高齢就農者のいる農家の農業経営の実態と、その意義について明らかにすることを目的とする。

分析としては、兼業農家の世帯主が農外就業していた時期と、彼らが定年退職などを機に就農した時期の農業経営の変化を分析する。こうした時系列に基づく分析は、農家を取り巻く経済状況や市場動向の変化などの社会的要因と、農家世帯員の就農による農業従事者の増加や、病気・死亡による農業従事者の減少などの世帯内要因の双方から、農家の農業経営を捉えることができる点で有効である。また、世帯主が高齢になって就農した後の農業経営の変化に注目する。それは、世帯主が就農後に年金や退職金などの社会保障を生計基盤とする一方で、農業に専門的に従事することで、新たな農作物や農業技術に挑戦するなどの発展性や革新性を持つ場合があり得るからである。

一般的に、基幹的農業従事者に占める高齢者の割合が高い作目は、水稻、養蚕、豆類・いも類、果樹類であるが、なかでも果樹類は投下労働力が多い一方で、収益性が見込める。ここでは、果樹類に着目し、その中でも柑橘類を取り上げる。柑橘産地は、高賃金下で省力的な技術展開を遂げてきたが、1972年以降の温州みかん(以下、みかん)価格の低迷に際して、雇用機会に恵まれた柑橘産地では、農家世帯主の農外就業が進んだ。兼業化が進んだ柑橘産地でも、前述したように世帯主が農業に復帰する際に、農業経営に変化が生じている可能性も否定できない。そこで、瀬戸内海中部の愛媛県越智郡上島町岩城島を事例として考察する(図10-1)。

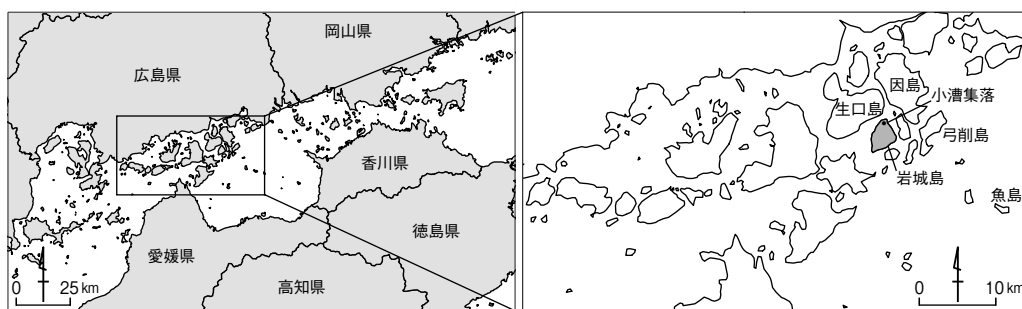


図10-1 岩城島の位置

このプレビューでは表示されないページがあります。

11 章 奄美諸島における糖業動力と搾車

I はじめに

糖業における生産力の発達、サトウキビ搾車という生産手段に負うところが大きく、その搾能力は人力、畜力、水力、石油発動機、電力といった動力の種類と、木製、石製、鉄製といった搾車(搾機)自体の性能に規定される。それゆえサトウキビ搾率の上昇が生産力の向上の一つの指標となる。奄美諸島においては、1955年頃まで、畜力や水力、石油発動機などを原動力とする小規模な製糖場が並存し、農民による零細な黒糖生産が行われていたが、本土資本による大型分蜜糖工場の設置によって、これらの黒糖工場はまたたく間に駆逐され、およそ300年間続いた「農工一体」は崩壊し、糖業史上における「農工分離」は大きな転換点となった。

このような視点から、糖業における生産力の展開を把握するためには、動力や搾車(搾車)などの技術に関する考察が不可欠と思われるが、資料的な制約からか、この種の考察はこれまではほとんど行われていない¹⁾。そこで本稿では、おもに近代糖業成立以前の動力と搾車について、奄美諸島を事例として基礎的な検討を行う。

II 糖業動力の展開と変化

わが国におけるサトウキビ栽培と製糖の歴史は江戸時代初期に始まるが、初期の製糖技術に関していえば、二つのローラーで搾る「二転子」から、搾車が三つの「三転子」に改良された²⁾程度の進歩がみられたにすぎず、動力はいずれも畜力であった。動力として水力が使用されるの

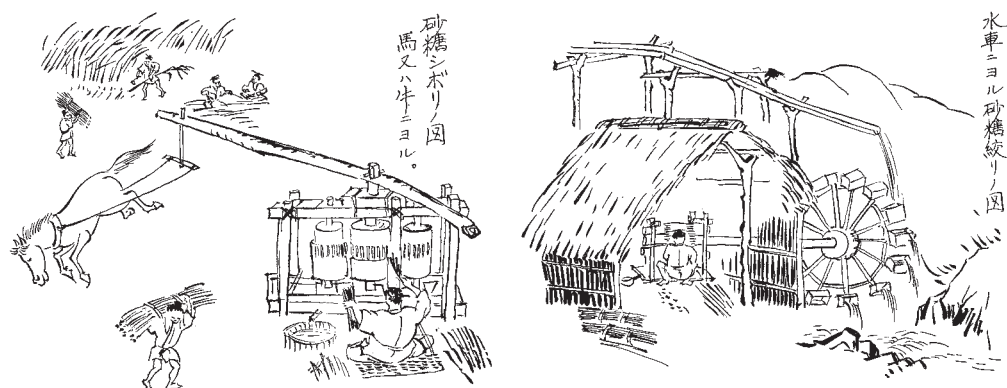


図11-1 畜力製糖と水車製糖(近世末期)

出典：名越佐源太『南島雑話補遺篇』（竹内利美・原口虎雄・宮本常一編『日本庶民生活史料集成 第20巻』三一書房、1972、536-537頁）。

このプレビューでは表示されないページがあります。

12章 長崎県池島における炭鉱開発と住民の対応

I はじめに

1. 従来の研究・問題の設定

鉱山集落の研究は、集落地理学の立場から最終的に経済地理学的分析を意図した川崎茂によって相応の体系化をみた¹⁾。その中で川崎は、鉱山集落と地域社会との問題、つまり鉱山集落の地元・周辺の他のコミュニティに対する影響、および両者の相互連関の問題を重視し、特に鉱業の成立期・変動期にはその問題が顕著に露呈すると指摘する²⁾。この課題に対し川崎は、「歴史的鉱山集落」の事例として飛騨神岡(岐阜県)および別子山村(愛媛県)における鉱山近代化過程を取り上げ、土地所有状況などを指標として地元村落の対応を論じている³⁾。

「近代鉱山集落」の事例としては、川崎は岩手県松尾鉱山集落や北海道の炭鉱集落の展開を取り上げるが⁴⁾、いずれも無人の地に初めて鉱山集落が成立する例である。一方、長崎県高島についての研究の中では⁵⁾、既存コミュニティとの問題を取りあげている。しかし、高島において炭鉱業が本格的に展開したのは明治の初期であり、この課題に関しては詳細な分析を欠いている。鉱業と周辺社会との関係という視点では、河野通博が岡山県柵原鉱山周辺の農家について農業と鉱山労働とのかかわりを論じている⁶⁾。しかしこれは鉱業展開後の関係が中心である。このように、鉱山集落の研究においては、特に近代において鉱業成立時の地域社会との関係を明らかにすることが課題の一つとして残されている。

鉱業以外の分野では、村上雅康が造船工業成立による地元住民の職業変化という視点から岡山県相生および広島県因島の事例を報告している⁷⁾。この住民の職業変化という指標を用いた分析は、鉱業成立時の問題にも適用できるものである。

以上のような問題提示により、本章では主に鉱業(炭鉱業)が成立する際の地元集落の対応を明らかにすることを試みる。

2. 分析の視点・枠組みの提示

まずここで、分析の枠組みを提示する。分析の都合上、「地方自治体(地方行政・議会)」「資本(企業)」「地域住民(生活体)」という三つの組織を指定する。その上で「資本(企業)」による炭鉱の開発を地域に対するインパクトと考え、「地域住民(生活体)」を中心に、各組織内の変化を考察する。住民にとって炭鉱開発は従来の生活や社会秩序の再編成を余儀なくするものである。開発時(鉱山集落成立時)において変化に直面する地域住民の対応の中に、生活に対する評価などが表出するものと考えうることから、開発交渉の経緯を詳しく分析する。また、炭鉱開発後の状況については、住民の就業状態の変化および社会組織の変容を指標として考察を行う。さらに、インパクトにより発生する3組織間の関係を順次取り上げる。ここでいう関係とは各組織が示す要

このプレビューでは表示されないページがあります。

13章 宮古島観光におけるインターネットの役割とその変化

I はじめに

1. 研究の背景と目的

1972年の沖縄の日本復帰以降、国土の南西端に位置する八重山諸島ではマリンスポーツを楽しんだり、諸島内の島々を巡ったりする観光客が増加した。これに伴い、石垣島や竹富島では多くの民宿が開業するなど、観光客向けの宿泊施設が復帰直後から整備された。また、1979年には小浜島にリゾート施設「はいむるぶし」が開業したのを皮切りに、1980～1990年代にかけてビーチリゾートホテルが相次いで開業した¹⁾。

一方、八重山諸島の北東側に位置する宮古諸島への来島客は、1990年代までビジネス客が中心であった。このため、宿泊施設も与那覇ビーチにある宮古島東急リゾート(1984年開業)を除けば、旅館やビジネスホテルが大半を占めており、その多くが平良港や宮古空港の旧ターミナルビルに近い平良市街に立地していた²⁾。1990年代末以降は、観光客の増加に伴って島内各所で民宿、ゲストハウス等の簡易宿所が増えてきた。とりわけ、2004年以降の増加が著しく、簡易宿所が島内の各所に設けられた。

助重は、宮古島における小規模宿泊施設(簡易宿所を含む)の急増とその要因について考察したなかで、小規模宿泊施設の存立基盤としてインターネットが大きな役割を果たしていることを明らかにした³⁾。観光関連産業におけるインターネットの活用に関及した先行研究としては、斑尾高原の宿泊施設におけるインターネットの活用について考察した近藤があげられる⁴⁾。また、ホテル業界に関連するインターネットサービスについて概観した植竹・青木の研究も重要である⁵⁾。このうち前者は、インターネットの活用が小規模宿泊施設の経営にもたらした効果や課題について考察しているが、それから10年以上経過した現在、高速ブロードバンド回線が広く普及し、大手旅行予約サイトが一般化するなど、観光業を取り巻く通信環境は大きく変化してきている。一方、後者はホテル業界が活用しているインターネットサービスの特徴や課題について考察しているが、それらが宿泊施設の経営にもたらした効果や変化については詳述されていない。

そこで本稿では、宮古島(池間島を含む)の観光におけるインターネットの役割が、助重が2009年に行った調査(以下「前回調査」と称す)以降における社会環境や通信環境の変化のなかで、どのように変わってきたのかを明らかにしていく。考察を進めるにあたっては、まず島外からの交通アクセスや諸島内の観光にみられる変化について述べた後、宮古島を訪れる観光客がどのような場面でインターネットを活用しているのかを、来島客への聞き取り調査をもとに明らかにする。さらに、前回調査で聞き取りを実施した小規模宿泊施設が、その後の社会環境や通信環境の変化にどのように対応してきたのかを、各施設への再調査をもとに解明していく。

このプレビューでは表示されないページがあります。

索引

配列は 50 音順。現地読みの項目には読みを付した。

A～Z

I ターン94, 115, 175
 LAN235
 LCC (格安航空会社)61, 223
 Main-island15
 SIDS (小島嶼開発途上国)26
 SNS (ソーシャルネットワーキング
 サービス)222, 230
 U ターン59, 61, 88, 94, 115, 125,
 129, 148, 175, 231
 Web サイト222, 228

ア 行

相生 (岡山県)197
 愛知県植物栽培所155
 赤瓦家屋群41
 アカコッコ館60
 安芸郡 (広島県)99
 アクセシビリティ23
 アクティビティ230, 236
 揚げ浜式78
 阿古村 (三宅島)49
 アシタバ51
 アシャゲ66
 アックミュゼアム67
 圧搾機72, 184, 189
 阿伝 (喜界島)65
 アホウドリ24
 天城村 (徳之島)194
 奄美 (鹿児島県)115
 奄美大島 (鹿児島県)19, 20, 23, 65,
 184, 188, 189, 192
 奄美群 (諸) 島 (鹿児島県)12, 13, 66,
 116, 183, 186
 奄美群島政府193
 奄美市 (奄美大島)184
 粟島 (香川県)36
 伊江島 (沖縄県)21, 35
 家大工99, 105, 112
 伊王島 (長崎県)200, 205
 イヶ谷村 (三宅島)49
 生きられた空間116
 池島 (長崎県)198, 210, 216
 池間島 (沖縄県)221, 224, 226
 イコン31, 43
 石井逸太郎10
 石垣 (沖縄県)65

石垣島 (沖縄県)18, 19, 21, 24, 134,
 221
 石敢當 (イシガンドウ)65
 石田龍次郎10, 14
 石巻湾 (宮城県)164
 移住システム論19
 移住者18, 133, 146
 移住プロセス18
 萎縮病172
 意匠化40, 41
 伊豆大島 (東京都)62
 伊豆諸島 (東京都)10, 14, 49
 伊豆村 (三宅島)49
 伊仙町 (村) (徳之島)185, 194
 板付船75
 一時帰宅53
 一代雑種162
 位置的特性35
 一本釣り202
 一本釣漁22
 移動経歴117
 移動経路116
 移動販売91
 移動目的133
 移動要因122
 移動理由117, 121
 糸満系漁民67, 80
 田舎暮らし146
 今治市 (愛媛県)101
 移民会社112
 伊良部島 (沖縄県)224, 226
 西表島 (沖縄県)41
 医療機関208
 医療サービス85
 医療施設88
 医療・福祉サービス116
 岩城島 (愛媛県)169, 171, 180
 岩城村 (岩城島)170
 岩倉市郎67, 72
 磐座八幡神社 (大三島)107
 因子分析 (法)17, 20
 インターネット221, 229
 インデックス31, 43
 因島 (広島県)107, 197
 インバウンド観光客35
 インパクト201
 インフォーマル・サポート83, 86, 93
 インフォーマルな情報120, 121, 172
 インフォーマル部門84, 90, 92

上島町 (愛媛県)170
 ウェブサイト31
 宇検村 (奄美大島)116
 兎島 (宮城県)155
 氏子組織144
 宇品 (広島県)109
 御嶽 (うたき)19, 135
 内側性115
 内田寛一10, 14
 内海市五郎156, 157
 海栗島 (長崎県)35
 馬73
 浦戸諸島 (宮城県)153, 166
 宇和島市 (愛媛県)170
 運動会91, 125, 142, 144
 エコツーリズム23, 63
 エスニック研究18
 江田島 (広島県)41, 42
 エネルギー政策198
 愛媛県農林水産研究所果樹センター ...
 170
 絵馬107, 109
 園芸作物156
 塩田78, 79, 101
 遠洋漁業160
 追い込み漁77
 大型分蜜糖工場183, 194
 大神島 (沖縄県)226
 大阪鉄工所189
 大阪鉄工所因島工場106
 大崎下島 (広島県)34
 大敷網202
 大島郡 (山口県)99
 大島郡産業振興策192
 大島 (愛媛県)22, 99
 大島 (長崎県)198, 199, 200, 206
 大島支庁 (鹿児島県)188
 大島紬185
 大島糖業194
 大手旅行予約サイト229, 234, 236
 大三島 (愛媛県)109
 大三島町 (大三島)101
 大物忌神社 (山形県鳥海山)40
 小笠原 (東京都)34
 おかず捕り65
 隠岐 (島根県)14
 沖島 (滋賀県)44

隠岐諸島(島根県).....	22
沖大東島(沖縄県).....	24
沖縄振興開発特別措置法.....	18
沖縄ブーム.....	11
沖縄(本)島(沖縄県).....	44, 184, 228
沖永良部島(鹿児島県).....	116, 185, 192
小漕集落(岩城島).....	174
越智郡(愛媛県).....	99
小野津(喜界島).....	78
小野寺亀一.....	156
尾道(広島県).....	38, 170
尾道大橋(広島県).....	38
温泉.....	49
音戸大橋(広島県).....	39

カ 行

カーフェリー.....	38
海外移民.....	99, 109
海外興業株式会社.....	103
海軍兵学校.....	41, 42
外国航路.....	202
介護サービス.....	85, 88, 93, 115
介護施設.....	85
介護保険.....	84, 85, 88
介護予防.....	91
海上交通.....	101
外部資本.....	149
外務省外交史料館.....	102
潰瘍病.....	178
外来種.....	73
家屋景観.....	41
カキ.....	164
蛸浦島(長崎県).....	198, 200
架橋.....	14, 23, 25, 38, 40, 165
架橋島.....	38, 44
カキ養殖.....	160
カキ養殖業.....	161, 164
隔絶性.....	15, 17, 20, 33, 38, 39, 40, 43, 80, 83, 84, 90, 93, 146, 149, 153, 154, 158, 166, 167, 189
格安航空券.....	61
学歴.....	118
加計呂麻島(鹿児島県).....	184
火口丘.....	51
鹿児島(鹿児島県).....	65, 126
鹿児島県大島郡振興計画.....	193
火砕流.....	51
笠岡市(岡山県).....	94
笠岡諸島(岡山県).....	94
火山ガス.....	52
火山性群発地震.....	51
火山灰.....	52
火山噴火予知連絡会.....	53
火山噴出物.....	49
鍛冶屋.....	106
ガジュマル.....	67, 71, 76, 78
過疎.....	83
画像テキスト.....	31
過疎化.....	11, 34, 116, 125, 133
語り.....	116
家畜.....	73
桂島(宮城県).....	153, 156, 157, 165
カトリック.....	23
川平集落(石垣島).....	134
川平湾(石垣島).....	134, 135, 146
カボチャ.....	65
神浦漁業協同組合.....	203
神島(三重県).....	20
神司.....	140
神着村(三宅島).....	49
カミミチ.....	66
カミヤマ.....	66
カヤ.....	74, 82
カルデラ.....	51
簡易宿所.....	221
灌漑.....	69
環海性.....	16, 17, 20, 33, 35, 39, 40, 43, 83, 84, 93, 149
灌漑用水.....	79, 81
柑橘.....	21
柑橘栽培.....	112
柑橘産地.....	169
柑橘生産.....	17
柑橘農家.....	172
柑橘農業.....	180
柑橘類.....	169, 170
環境の島嶼性.....	16
環境保全型農業.....	21
換金作物.....	69, 161, 203
観光.....	49
観光化.....	11
観光ガイド.....	61
観光客.....	145
観光客数.....	59
観光情報.....	222
観光地化.....	13
観光ブーム.....	146
甘藷.....	102, 200, 202
甘藷モノカルチャー.....	65
喜界馬.....	73
喜界島(鹿児島県).....	65, 186, 192
起業.....	61
キク.....	65
気候温暖化.....	26
記号論.....	31, 33, 43
北大東島(沖縄県).....	36
キヌサヤエンドウ.....	51
義務教育.....	119
キャンプ.....	225
旧岡山村(大三島).....	99
救急艇.....	88
救急病院.....	88
教育隣組.....	142, 146
狂言.....	145
狭小性.....	16, 17, 190
協働.....	145
共同商店.....	117
共同製糖場.....	192, 193, 194
共同体.....	141

共同体意識.....	206, 210, 216
共同体社会.....	19
共有地.....	73, 141
共有林.....	202
拳家離村.....	118, 120
漁業.....	105
漁業地理学.....	22
漁場利用形態.....	22
居住形態.....	117, 136
居住地移動.....	115, 120
居住地選択.....	129
漁撈.....	75, 78, 80
漁撈活動.....	65
キリシタン迫害.....	201
近接性.....	23
近代鉱山集落.....	198
近代地理学.....	9, 25
近代日本.....	99
近隣.....	90

空間.....	67, 74, 78
空間再編成.....	214, 215, 216
空間的移動.....	128
空間的移動パターン.....	115
空間的特性.....	116
空間配置.....	80
空中写真.....	67
久高島(沖縄県).....	22
口コミ.....	229, 230, 236
口総(くちすば、大三島).....	99
忽那諸島(愛媛県).....	83, 86, 93
熊谷亀之助.....	156
クラスター分析.....	17, 22
倉橋島(広島県).....	39
来間島(沖縄県).....	224, 227
呉(広島県).....	107, 112
呉海軍工廠.....	106, 109
呉海軍工廠広支廠.....	106
グローバルな課題.....	26
グローバル化.....	133

経営戦略.....	21
景観.....	116
景観の要素.....	41, 43
景観テキスト.....	31
経済活動.....	66
経済基盤.....	117
経済地理学.....	22
傾斜変換点.....	191
系統地理学.....	13, 25
系統分離法.....	158
京浜工業地帯.....	119
芸予諸島(広島県・愛媛県).....	99, 109, 170
ゲートボール場.....	117, 124
下射式水車.....	191
ゲシュタルト.....	40, 43
ゲストハウス.....	221, 226, 229, 231
結願祭.....	144
結球性.....	155, 159

結婚.....117, 121
 結節構造.....23
 兼業化.....169
 現金収入.....161
 現象の島嶼性.....16
 玄武岩台地.....200
 原料炭.....198

 行為空間.....24
 行為主体.....24
 行為目的.....24
 鉱業.....197
 鉱業空間.....198, 214
 公共工事.....57
 公共事業.....51
 航空ネットワーク.....23
 後継者.....127
 耕作放棄.....87, 177
 鉱山集落.....197
 小牛田農林学校(宮城県).....156
 高速船.....86
 耕地面積.....105
 交通インパクト.....23
 交通ネットワーク.....23
 神津島(東京都).....53
 高度経済成長期... 10, 20, 34, 116, 121, 127, 167, 169, 176
 交配種.....171
 神戸(兵庫県).....107, 112
 公民館.....140, 146
 郷友会.....115, 125
 古宇利島(沖縄県).....24
 交流人口.....146
 高齢化.. 34, 49, 62, 65, 83, 115, 121, 165, 170
 高齢化率.....88
 高齢者.. 85, 107, 115, 122, 145, 212, 215
 高齢者人口.....50
 高齢者世帯.....86
 高齢就農者.....169, 175, 178
 港湾都市.....20
 コード.....32, 43
 国勢調査.....9, 18, 50, 86, 216
 黒糖.....72, 79, 82, 183
 黒斑病.....178
 小佐渡山脈(佐渡島).....40
 掙 嘉一郎.....67, 81, 82
 牛頭天王祭(三宅島).....59
 五大堂(松島).....153
 国家権力.....15
 国境の島.....35
 五島列島(長崎県).....203
 小浜島(沖縄県).....19, 23, 221
 ゴマ.....65
 コミュニティ...24, 83, 115, 129, 197
 小物忌神社(山形県飛鳥).....40
 雇用機会.....119, 169
 コラージュ.....34, 43
 混住化.....133, 145, 146

サ 行

サービス施設.....115
 災害.....99
 祭祀.....22
 採種組合.....157, 166, 167
 採種圃場.....157
 再生産.....88
 栽培技術.....172, 179
 栽培作物.....175
 財閥系資本.....200
 在来種.....73
 佐伯郡(広島県).....99
 先島航路.....222, 230
 崎戸(長崎県).....198
 崎戸島(長崎県).....200
 佐久島(愛知県).....20
 搾車.....183, 194
 在来——.....187, 188, 194
 讃岐型——.....187
 畜力——.....185
 佐々木彦一郎.....14
 砂州.....36
 雑菜刈り.....165, 167
 薩南諸島(鹿児島県).....22
 サツマイモ.....69, 73, 75, 79, 82
 砂糖.....192
 サトウキビ.....21, 65, 69, 72, 78, 79, 82, 124, 135, 146, 184, 190, 193
 サトウキビ圧搾機.....183
 サトウキビ搬入園.....192
 砂糖組.....185
 砂糖小屋.....71, 72, 74, 78, 79
 砂糖商人.....191
 佐渡島(新潟県).....38, 40
 佐渡金山.....40
 錆ヶ浜港(三宅島).....50
 寒風沢島(宮城県).....153, 165
 座間味島(沖縄県).....18, 23, 37
 サワラ突き漁.....67
 産業基盤.....149
 産業構造.....14, 20, 170, 198
 サンゴ礁.....184
 サンゴ石.....72, 75, 79
 山村振興.....25
 産地化.....172
 産地形成.....21, 156
 産地再編.....172
 三陸沿岸.....164

 ジェットフォイル.....38
 塩竈市(宮城県).....153
 仕送り.....107
 地方(じがた).....14, 15
 自給自足.....65
 自給的農業.....200, 204
 自給的畑作農業.....202
 自給用作物.....102
 四元交配.....163
 獅子舞.....145

自然環境.....14
 自然景観.....36
 自然災害.....49
 自然受粉.....163
 自然地理学.....14
 持続可能な開発.....26
 接続性.....40, 43
 自治組織.....140, 215
 節祭(石垣島).....144
 市町村合併.....83, 92
 篠島(愛知県).....20
 地盤沈下.....52
 澁澤栄一.....67
 澁澤敬三.....67, 81
 澁澤写真.....67, 80, 81
 資本主義化.....198
 資本主義経済.....16, 22
 シマ.....68, 80, 116
 島おこし.....18
 島旅.....237
 しまなみ海道.....38
 しまなみ農業指導班.....170
 島らしさ.....31, 37, 43
 下間忠夫.....14
 社会環境.....221
 社会関係.....117
 社会空間.....19, 142
 社会構造.....20, 140, 210
 社会組織.....197, 198, 215
 『社会地理』.....14
 社会的ネットワーク.....115
 社会福祉協議会.....85, 86, 91
 若年労働力.....119
 社宅.....121, 126
 就業機会.....122
 就業形態.....133, 202
 就業構造.....138
 宗教的空間.....141
 集合住宅.....137, 146
 就職.....117
 修正ウィーバー法.....17
 集団就職.....119
 住民組織.....91
 重要伝統的建造物群保存地区.....34
 集落空間.....146
 集落景観.....14, 41
 集落祭祀.....140, 145, 149
 宿泊施設.....221
 主成分分析.....17
 酒造業.....65
 出郷者.....115, 120, 126
 出産.....117
 主島.....40
 商業資本.....24
 商工会議所.....223
 少子高齢化.....25
 小島嶼.....14
 小豆島(香川県).....22
 庄内平野(山形県).....40
 鍾乳洞.....36

消費行動 24
 商品作物 102
 情報検索 236
 職業安定所 121
 蔗作 188
 職工 106
 自立的発展 133
 新石垣空港 222, 224
 人口維持 133
 人口移動 18, 99, 115, 116
 人口移動モデル 115
 人口過剰 99
 人口逆流現象 18
 人口減少 24, 49
 人口増加 133, 135
 人口地理学 115
 人口分布 115
 人口流出 88, 148, 205
 人口流入 205
 親族集団 72
 新中央航空 63
 人頭税 24
 新日本航空 61
 『人文地理』 14
 人文地理学研究 9
 親睦組織 125
 シンボル 31, 43
 心理的な距離 237
 診療所 116

 スイカ 65
 瑞巖寺(松島) 153
 水車製糖 184, 190, 191
 水田 101, 191
 水力製糖場 193
 周防大島(山口県) 19
 スカイマーク・エアラインズ 223
 菅野鉦次郎 155
 スコリア 52
 スコリア丘 39, 51
 ススキ 72, 73, 82
 画像分析 31
 ステレオタイプ 41, 43
 スマートフォン 222, 236
 住用村(奄美大島) 185, 193
 住み分け 214, 216

 製塩 78, 82
 生活環境 120
 生活基盤 117
 生活形態 201
 生活行動 115
 生活行動圏 24
 生活支援 83, 89, 93
 生活資金 128
 生活様式 19, 22, 23
 生業活動 65, 74, 78, 80, 102
 生業空間 82
 生計維持 105, 180
 脆弱性 22, 26, 99

製糖 71, 78, 183, 188
 製糖改良試験 187
 製糖期間 192
 製糖技術 183
 製糖業 65
 製糖小屋 191
 製糖作業 78
 製糖用水車 194
 青年会 140, 145
 西彼炭田(長崎県) 198
 世界自然遺産 12
 石炭船 202
 石炭庁 200
 石油発動機 193
 セグリゲーション 18
 世帯主 .. 21, 105, 138, 169, 175, 176, 179
 石灰岩 36
 石工 99, 105, 106, 112
 絶対的孤立 16
 瀬戸内地方 99
 瀬戸内町(奄美大島) 184
 船員 105, 201, 202
 尖閣諸島(沖縄県) 24
 千石船 153
 先住者 18, 133, 146
 前住地 117
 仙台白菜 162, 164
 全島避難 49, 53
 全日本空輸 50, 223

 総買入制度 186
 送金 120
 相互扶助 115, 125
 造船業 175, 180, 197
 造船所 106, 109
 相対的孤立 16
 ソーシャル・サポート 85
 疎開命令 24
 ソテツ 69, 72, 74, 75, 78, 79
 外海町(長崎県) 214
 ソフトツーリズム 23
 ソラマメ 71
 村営住宅 122, 127, 129
 村落共同体 185
 村落構造 19, 201
 村落社会 86, 93

タ 行
 太鼓 145
 大根島(島根県) 44
 滞在可能時間 23
 第三紀層 200
 大都市圏 119
 大都市圏郊外 115
 ダイナミック・パッケージ 229, 235
 ダイビングサービス 135
 ダイビングポイント 61
 ダイビング観光 23
 ダイビング業 148

台風 85
 太平洋炭礦(北海道) 198
 タイモ 73
 大連(中国) 107
 台湾基隆船渠会社 107, 109
 高島(長崎県) 197, 198, 200
 高接ぎ 172
 タケ 75, 78, 79, 82
 竹芝栈橋(東京都) 50
 竹富島(沖縄県) 23, 41, 221
 立ち泳ぎ漁 77
 龍郷町(奄美大島) 184, 191
 タッチュー(伊江島) 35
 立縄漁 67
 多島海 153
 頼母子講(たのもしこう) 125
 多胚性品種 171
 タブレット 222, 236
 多変量解析法 17
 ダム建設 213
 多良間島(沖縄県) 19, 21
 団塊の世代 115
 「檀家」制度 41
 短距離移動 115
 炭鉱 20
 炭鉱開発 210
 段々畑 203
 暖地性園芸 51
 単胚性品種 171

 地域行事 91, 144
 地域コミュニティ 91
 地域資源 62
 地域社会 .. 23, 59, 115, 133, 149, 197
 地域住民 197
 地域振興 18, 23
 地域の条件 116
 地域包括支援センター 91
 地域労働市場 17
 地縁・血縁 83, 129, 133, 141, 146
 地縁組織 19
 地縁団体 18
 地縁の結合 215
 地縁の集団 72
 地縁の組織 215
 『地学雑誌』 10
 『地球』 10
 畜力 183, 193, 194
 畜力製糖場 191, 193
 治山砂防 56
 地誌学 14
 地誌学のアプローチ 15
 地籍図 80, 81
 父島(東京都) 34
 知的財産法 171
 知夫里島(島根県) 94
 中山間地域 84
 中枢管理機能 57
 鳥海山(山形県) 40
 鳥瞰図 107

長期避難 53
 長距離移動 115, 128
 長周期移動 129
 長周期Uターン移動 116
 町村制施行 153
 徴発物件一覧表 105
 『地理学評論』 10, 14
 地理的条件 149
 賃金 105
 賃貸住宅 126

 通院行動 24
 通過儀礼 125
 通勤兼業 21
 通信環境 221
 通年観光地 224
 対馬海峡 35
 対馬島(長崎県) 35
 辻村太郎 10, 14
 ツバル 26
 坪田村(三宅島) 49

 定期船 40, 53
 デイサービス 84
 定住人口 62
 定年退職 118, 122, 128, 169, 173
 データベース 9, 32, 43
 出稼ぎ 99, 109, 128, 201, 202
 テングサ景気 50
 転出 88
 転職 120, 128
 伝統芸能 145
 伝統的行事 133
 伝統的工芸品 41
 伝統文化 13
 電力 193

 東海汽船 50
 島外行動 24
 島外避難指示 53
 東京愛らんどシャトル 50
 東京奄美会 125
 糖業改良事業 192
 糖業振興計画 192
 同郷組織 125
 同郷団体 13
 東京地学協会 10
 東京都三宅支庁 53
 島司 191
 島嶼学 25
 島嶼研究 9, 25
 島嶼社会研究会 10, 15, 17
 島嶼性 13, 16, 26
 島嶼地域 115
 島嶼町村制 49
 島嶼地理学 10, 16
 島嶼都市 20
 東邦航空 50
 堂前亮平 11

島民電話帳 62
 島民ふれあい集会 62
 動力 183
 動力革命 193, 194
 東和町(周防大島) 19
 渡海船 101
 トカラ列島(鹿児島県) 12
 特産品 65
 特産品開発 13
 独占資本 24
 徳之島(鹿児島県) 19, 126, 184, 185, 188, 189, 192
 徳之島町(徳之島) 185
 渡航者名簿 102
 都市地理学 19, 20
 鳥島(東京都) 24
 土石流 52
 土地所有 214, 216
 土地台帳 80
 土地利用 19, 21, 25, 116
 トネヤ 66
 飛島(山形県) 40
 トビシマカンゾウ 40
 土見東一 157
 トンボロ 36

ナ 行
 内藤新宿試験場 155
 内務省勤業寮 155
 中島(愛媛県) 84, 89
 長暮(ながはぐ) 36
 中俣 均 11
 梨 102
 名瀬(奄美大島) 116, 125, 193
 夏植え 71
 ナハ世 66
 南西諸島(鹿児島県・沖縄県) 41, 184
 南島 41
 南予地方(愛媛県) 170

 新島(東京都) 58
 二期作 69
 肉用牛 21
 二元交配 163
 二酸化硫黄 52
 西川栄一 14
 西彼杵半島(長崎県) 198, 200
 日本航空 237
 日本常民文化研究所 67
 日本地理学会 10, 25
 日本島嶼学会 25
 日本トランスオーシャン航空 223
 日本復帰 66
 日本野鳥の会 63
 ニワトリ 73

 沼倉吉兵衛 155, 166
 年間観光客数 223

年間来島者数 60
 年金 127, 129, 169

 農外就業 169
 農家民泊 226
 農業 78, 135
 農業技術 169
 農耕儀礼 19, 144
 農作業 122
 農商務省 188
 農村社会 133
 農村地理学 21
 野々島(宮城県) 153, 165
 野母半島(長崎県) 198, 200
 ノリ 164
 ノリ養殖業 164

ハ 行
 パース 31
 ハードツーリズム 23
 「排除の空間」 23
 バインアップル 135, 146
 延縄漁業 22
 伯方島(愛媛県) 99
 ハクサイ 153
 ハクサイ採種業 154, 166, 167
 馬耕 71
 端島(長崎県) 198, 200
 場所 67
 畑地 101, 202
 葉タバコ 21
 八月踊り 125
 バック旅行 61
 バックージュツアー 228, 229
 ハッサク 172, 180
 初島(静岡県) 14
 ハ丁平カルデラ 51
 発動機 193
 羽田空港(東京都) 50
 バブル経済 23
 春植え 71
 ハワイ移民 99
 藩政村 101
 バンデミック 24

 東日本大震災 49, 166, 227
 非景観的要素 33, 43
 被災地 49
 非正規雇用 127
 日立造船 170
 日間賀島(愛知県) 20
 ヒメタニワタリ 36
 百之台(喜界島) 65
 平岡昭利 11, 25
 品種改良 156

 風景印 31, 33, 43
 風水思想 19
 フェリー 86

フォーマル・サポート..83, 85, 86, 93
 フォーマルな情報.....119, 121
 フォーマル部門.....84, 88, 92
 フクギ.....41
 福祉サービス業.....94
 福島県双葉郡.....49
 婦人会.....140, 144, 145
 ブタ.....73
 舞踊.....145
 不動産業者.....19
 船大工...99, 103, 105, 109, 112, 204
 部分地域.....25
 ブランド化.....171
 フリーペーパー.....230, 236
 ブログ.....222, 230, 234
 文化地理学.....22, 23
 文化論的転回.....22

米軍演習場.....21
 米軍統治下.....13
 舩倉島(石川県).....10
 別荘.....137

放射能.....49
 放射能汚染.....63
 棒術.....145
 豊年祭.....125, 144
 防風林.....41
 放牧地.....135
 訪問介護.....85, 88, 93
 訪問看護.....89
 ホウレンソウ.....160
 朴島(宮城県).....153
 ホームページ.....222
 星砂.....41
 補償金.....212
 圃場整備事業.....66
 補助金.....160, 192
 補助事業.....17
 ホタテ貝.....164
 本州四国連絡道路.....38
 本土.....40
 本土資本.....183
 本土復帰.....135, 145, 221
 本土―離島関係.....15

マ 行

マージナル諸島.....26
 マイナー・サブシステンス..65, 75, 80
 松島炭鉱株式会社(長崎県).....199, 204
 松島(長崎県).....153, 198, 200
 松島白菜.....153, 155, 156, 166
 松島湾(宮城県).....153, 158, 164
 松山離島振興協会(愛媛県).....94
 まなざし.....32
 マニラ移民.....99, 112
 真野湾(佐渡島).....40
 馬放島(宮城県).....155
 マラリア有病地.....24
 マリンスポーツ.....225, 227

マリンレジャー.....61
 マンゴー.....65

三池港(三宅島).....50
 みかん.....176
 ミカン.....124
 御蔵島(東京都).....50
 ミクロスケール.....198
 御手洗(大崎下島).....34
 三井鉱山.....199
 三井石炭鉱業三池炭鉱.....198
 南島島(東京都).....24
 三原市(広島県).....170
 三原山噴火.....62
 宮城県立農事試験場.....155, 156
 宮城農学校.....155
 三宅島(東京都).....39, 49
 三宅島雄山噴火.....49
 三宅村(三宅島).....49
 宮古島(沖縄県).....19, 24, 226, 228, 236
 宮戸島(宮城県).....153, 154, 158, 166
 宮古島観光協会.....226
 宮古島市(宮古島他).....223
 宮古諸島(沖縄県).....221
 宮島(広島県).....23
 宮大工.....106
 民宿.....23, 54, 135, 145, 146, 165,
 221, 226, 229, 231
 民俗名称.....22

向島(広島県).....38
 睦月島(愛媛県).....83, 86, 93

名望家.....157
 メロン.....65
 綿作.....102

模合.....142
 モチーフ.....32, 33, 37, 43
 森岡移民株式会社.....103

ヤ 行

八重山(沖縄県).....144
 八重山移民促進.....24
 八重山諸島(沖縄県).....24, 221
 八重山ミンサー.....41
 ヤギ.....73
 焼内湾(奄美大島).....116
 屋久島(鹿児島県).....12, 18, 23
 野菜.....122, 127, 177
 八幡浜市(愛媛県).....170
 山階芳正.....17

ユイ.....185
 ユイワク.....191
 有人島.....9, 83, 86, 153, 159
 湧水.....81
 郵便局.....19, 31, 43, 212
 湯湾岳(奄美大島).....184

ゆんたく.....231, 237

溶岩流.....39
 養殖業.....160
 予算の一括計上.....17
 寄棟造り.....41
 与那国島(沖縄県).....24
 与路島(鹿児島県).....81
 与論町(鹿児島県).....185
 与論島(鹿児島県).....23, 185, 192

ラ 行

ライフイベント.....178
 ライフコース.....129
 ライフサイクル.....18
 ライフヒストリー.....117
 ライフライン.....53

リゾート型観光地.....23
 リゾート法.....23
 『離島研究』.....25
 離島研究.....9, 10, 25
 離島地域研究グループ.....25
 離島社会.....11, 14
 離島住民.....38
 離島振興.....13
 離島振興政策.....15, 17, 24, 40
 離島振興対策実施地域.....16
 離島振興法.....15, 17, 44, 153
 離島ブーム.....11
 隆起サンゴ礁.....36, 65
 琉球王朝.....66
 琉球政府.....18, 193
 琉球列島.....19
 琉球エアコミューター.....223
 竜佐運.....184
 両津湾(佐渡島).....40
 緑肥.....71
 旅行会社.....60
 隣保組織.....142

レザーフアン.....51
 レジリエンス.....26
 レモン.....175, 177, 180
 連絡船.....39, 41

老人会.....140, 144
 老人福祉センター.....116
 ローカル・コモンズ.....80

ワ 行

ワイズ・ユース.....80
 渡辺採種場.....156, 158, 164, 166
 渡邊頼二.....156, 166
 和泊町(村)(沖永良部島).....185, 192
 鰐浦(対馬島).....35

執筆者 (執筆順、*印は編者)

Miyauchi	Hisamitsu	
* 宮内 久光		琉球大学法文学部人間科学科 教授
Suyama	Satoshi	
* 須山 聡		駒澤大学文学部 教授
Takagi	Akira	
高木 亨		福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任准教授
Seto	Masayuki	
瀬戸 真之		福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任研究員
Fujinaga	Go	
藤永 豪		佐賀大学文化教育学部 准教授
Morita	Eriko	
森田 枝里子		株式会社バスモ
Hanaki	Hironao	
花本 宏直		琉球大学教育学部 講師
Jung	Mee Ae	
鄭 美愛		駒澤大学文学部 非常勤講師
Matayoshi	Shoichiro	
又吉 祥一郎		沖縄県立中部商業高等学校
Shimizu	Katsushi	
清水 克志		秀明大学学校教師学部 講師
Uemura	Madoka	
植村 円香		秋田大学教育文化学部地域文化学科 講師
Hiraoka	Akitoshi	
* 平岡 昭利		下関市立大学経済学部 教授
Miki	Tsuyoshi	
三木 剛志		公益財団法人日本離島センター
Sukeshige	Takehisa	
助重 雄久		富山国際大学現代社会学部 准教授

Research into People, Life and Industry of
the Japanese Islands V

りとうけんきゅう

離島研究 V

発行日 ————— 2014 年 11 月 10 日 初版第 1 刷

定 価 ————— カバーに表示してあります

編 者 ————— 平 岡 昭 利

須 山 聡

宮 内 久 光

発 行 者 ————— 宮 内 久



海青社
Kaiseisha Press

〒520-0112 大津市日吉台2丁目16-4
Tel. (077) 577-2677 Fax (077) 577-2688
<http://www.kaiseisha-press.ne.jp>
郵便振替 01090-1-17991

● Copyright © 2014 ● ISBN978-4-86099-292-7 C0025
● 乱丁落丁はお取り替えいたします ● Printed in JAPAN

ISBN978-4-86099-929-2 (eブック版)